2019.11.21

大草

読書メモ

119.中野孝次「良寛に生きて死す」考古堂書店（2005.1）

120.藤村正之他「仕事と遊びの社会学」岩波書店（1995.12）

121.多田道太郎「遊びと日本人」角川書店（1980.6）

（次回報告：122.岩田慶治「人間・遊び・自然」日本放送出版協会（1986.11））

**＜藤村正之他「仕事と遊びの社会学」から＞**

　この本は、変動の時代である現代の社会学、社会分析の到達点を明らかにするため、社会学、人文・社会諸科学、文学、芸術の諸分野で活躍中の研究者の小論文集である。

・＜井上俊「生活の中の遊び」から＞

　Ｍ・チクセントミハイ（米国の心理学者）は、遊びのなかで人がしばしば経験する「楽しさへの没入感」、「全人的に行為に没入しているときに人が感ずる包括的感覚」を「フロー」と名付けた。このフロー経験は確かに遊びにおいて典型的に生じるが、たとえば外科手術のような仕事の領域においても生じると論じた。逆に、フローと対立する不安や退屈の経験が遊びのなかで生じることもあるとも論じた。（仕事と遊びという二分法と遊びは楽しく仕事は辛いという固定観念を否定した点で評価されている）

・＜仲村祥一「仕事と遊び」から＞

・「遊びは大きく分けて二種類・・・つまりお金を賭けるか、賭けないかである」ゆえに「ホイジンガとかカイヨワとかあまり遊びとは縁がなさそうな書き手」と称しこの2人を皮肉るように仲村は書いている。（正確に記述して欲しい）

・遊びは仕事たり得るか？パチンコ好きの仲村は、パチンコは科学的な研究を仕事としてしなければ勝てないと悟り、遊びのパチンコでは生活費を稼げる仕事にはなりえないと結論付けている。パチンコ以外の遊びも同様と言っているようである。

・仕事は、遊びのなかにあるスリル、熱中、探求心などの満足も与えてくれる。難治の患者の外科手術の成功、海底トンネルの開通、宇宙飛行の成功などを見れば分かり易い。

・＜藤村正之「仕事と遊びの社会学」から＞

・ローマ帝国の政治家の役割は、「パンとサーカス」を提供することであった。現代も同様で「福祉国家体制整備とメディアの普及によるマス・カルチャの隆盛」（分かり易くいうと「福祉国家とテレビ」）が政治家の課題となっている。

・ホイジンガとカイヨワは遊びそのものを研究対象としたが、ジンメル（ドイツの哲学者・社会学者（1858-1918））は人間関係そのものを遊ぶということに注目して研究し、社交論を唱えた。ジンメルは社交を「社会化の遊戯形式」と位置づけ、形式であるはずの人間相互の関係を自己充足的に楽しむものと考え、社交と現実との関係は、芸術とリアリティ（現物）との関係に類似していると言っている。

・「仕事と遊び」は「労働と余暇」としてとらえ直すことができる。私たちは、一日を労働時間、生活必要時間、自由（余暇）時間の三つに分割してとらえる習慣がある。

・1920年サモアのツイアビ酋長が語ったとされる西欧旅行記「パパラギ」の記録。「物が沢山なければ生きていけないのは心が貧しいからだ」「自分の時間を奪うものの名前を無数にあげ、楽しみも喜びもない仕事にぶつくさ不平をいう」「日の出から日の入まで、人間には使いきれないほどの沢山の時間があることを教えなければならない」

・高度産業化で先進諸国の生活水準は上昇したが、仕事での充足感は低下してきた。また、労働と余暇について人間の関わり方が二極化した。即ち、仕事に傾斜する管理職や一部専門職と余暇や家族に傾斜する労働者の二極化である。

・現在は、労働の質（ＱＷＬ）の再構築や脱企業空間での労働の促進など、仕事そのものを見直す動きが目立ってきた。

・社会的地位や金銭的実力を示すための消費、「誇示的消費」を行ったのが、「有閑階級（レジャークラス）」である。夫は労働に追われるため、妻子が消費の担い手となる、また定年退職した老人も「新有閑階級（ニュー・レジャークラス）」と呼ばれた。「労働と余暇」は時間配分とならんで、人的配分の問題がある。即ち、「新有閑階級」を担うのは、妻子や定年退職者に偏っている。一般的に働いてないときは「遊んでいる」と思われる。子供、青年、老年、専業主婦などは、働いていないので「遊んでいる」として分類される。「贅沢は敵だ」の価値観から「贅沢は素敵だ」に変化した。

・資本主義の異なる展開形態としてのアメリカ自由主義体制、欧州の福祉国家体制、日本の会社主義体制がある。

・「社交」というのは、すべての人間が平等であるかのように、同時にすべての人間を尊敬しているかのように、人々が「行う」ところの遊戯である（ジンメル）

・「新有閑階級」たる老人のなかには、散歩や掃除を「仕事」と位置付けるものもいて、「怠けること」への忌避感が見られもする。彼らは、老いてますます盛んと活動を促す価値意識によって拘束され、「老いてますます」耄碌するという自然の衰退を許さない。

・「怠ける」ことが許されず、「暇」そのものが価値づけられない現代日本社会では、「遊び」さえ「真剣」にしなければならなくなっている。

・「遊び」は「余裕」に通じるところがあり、（何かとの）距離の創出という側面がある。

・「遊び」の要素には、距離の設定がふくまれる。しかし、何かと距離をとり相対化することができなくなる時、すなわち余裕をなくす時、「遊び」は「遊び」でなくなる。「遊び」だったはずのいじめが、殺人へと変質していく。

・「仕事」と「遊び」の違いは、内容の区別でも、時間の区別でもなく、意味付与の違いなのだともいえる。ボランティアの動向も示すように、自由時間を使った「仕事」的な活動は、もちろん職業労働ではないが、完全な「遊び」とも言い難い。ボランティア活動などが充実感と結びつきやすいのは、「遊び」のもつ距離を設定した自由な関わりと、職業労働の持つ社会的連関性とが、適度にまざりあっているからであろう。

・「遊び」の精神で距離をとろうとすればするほど差異化メカニズムにからめとられて距離が取れなくなる。むしろ、「仕事」の側に従来の「仕事」とは異なる形でふみこんでいく時、現代社会の差異化メカニズムからの逃げ道が用意される。それは、心理療法でいう「症状処方」に近い（症状処方とは、不眠症の人に「眠ってはいけない」と言うように逆説的な指示をすることをいう）。

・高度産業社会と高度消費社会がシステムの両輪として成立し、「欲望」というパンドラの箱を開け放たれた20世紀は、「自由が欲しい」時代から「自由が辛い」時代への変質でもあった。そんな時代を「ラクに生きる」ために、人生そのものを束の間の「遊び」と笑い飛ばしていくか、それとも「仕事と遊び」という枠組み自身をとらえ直し、「仕事」でも「遊び」でもない、だからこそ「仕事」でも「遊び」でもあるような時間・空間を「生きる」ことを求めていくか。「仕事と遊びの社会学」は「＜生＞の社会学」として構想しなおされる時、その役割をバトンタッチされるのかも知れない。21世紀に向けて、社会学はそのような思想的課題に応えることができるだろうか。

**＜多田道太郎「遊びと日本人」から＞**

　この本は、日本人の遊びの傾向が歴史との関わりのなかで育まれたことを証明し、同時に、著者の遊びに対する感情・体験をもとに、人間が遊びをするにあたって非論理的にならざるを得ないほど遊びには魅力があることを証明している。

・パチンコをカイヨワ（1972年来日）は「低次元の空虚な眩暈（げんうん）である」と酷評し、開高健もパチンコは倦怠と孤独の遊びであると見下している。

・しかし、パチンコ好きの多田道太郎は、「パチンコは日本人が急激に伸びていく工業化社会の中に自分を同化させるための一つの手段であったと思う」といい「パチンコは文化に順応するという側面を持っている」ともいっている。（パチンコに対する評価はまちまち。開高やカイヨワのように低評価する意見もあれば、パチンコの「騒音」「殺気」にダイナミズムを感じると高評価する人もいる。この国民的広がりを持つパチンコという娯楽は、日本文化の一つといえよう。）

・日本人の風呂好き（高温多湿対応の他に、宗教的、半宗教的習慣のミソギ、ススギの流れや、光明皇后の始めた「千人風呂」のような施し風呂の流れがある。「聖」の世界で始まったものが「俗」の世界に入ってくる。「聖」なる文化が「俗」なる文化として生き延びている）は遊びの文化である。（風呂は、聖→俗→遊への変化の一例である）

・フランス人は食事に二時間もゆっくり時間をかけて楽しみ、そこにゆとりを感じる。日本人はのんびり風呂に入るところにゆとりを見つける。日本人の遊びといえば風呂といってもおかしくない（かつて、石川三四郎（社会運動家・アナキスト・作家）は、世界の政治家たちを温泉に集め、そこで裸で会議させるという案を考えたという）。

・日本人が自分の家に「遊びにいらっしゃい」と招くときの「遊び」は仕事ではなく、勉強でもなく、特別の遊戯をするわけでもなく、ただ顔を合わせてたわいないことを話してアハハと笑って楽しむだけである。この楽しみが「遊びにいらっしゃい」の正体である。ここに日本人の遊びの原初的な、基本的な姿があるという（P85 ）。

・遊びとは言葉のレベルでいえばいつも何かの反対語だった。倫理、慣習の面でいえば、遊びはまじめの反対である。社会生活の面でいえば、遊びは労働の反対である。つまり、遊びは何かの「影」として意識され続けてきたといえる。では、まじめでなく労働でなければ遊びが成立するかといえば、そうでもない。それは必要条件であっても十分条件ではない。（P88）

・なんとはなしの雑談こそ、遊びの原初のかたちを伝えている。女の長電話とか井戸端会議とかは、内容のない無駄話が大半であり、それが楽しいのである。重要なのは、内容ではなく、尽きることのない興趣が内側からこんこんと湧くらしいその原初の遊び気分が重要なのである（P87）。

・遊びの気分を言葉でとらえるのはなかなか難しい。言葉は遊びの気分とは別の領域で大いに発展してきたからである。しかし、幸いなことに私たちはまだ野原で無邪気に遊び戯れる子供たちを持っている。雀の群れが気まぐれに飛び降り、一斉に飛び立つように、彼らは気まぐれに群がり一斉に走り去る。その後ろ姿は私たちに何かある確実なものを語りかけていないか。実際、遊ぶ子供の声を聞けば魂までも揺るがされるのである(P88)。

・美をふくむ文化一般のなかで、そして文化そのものの根源において「遊び」をとらえ直そうというのがホイジンガの偉大な着目だった。そして、この着目から遊びのさまざまの特性をひきだし、世人を瞠目させたのであるが、しかし、このホイジンガもやはり「おもしろさ」の分析と論理的解釈には諦めている。もっとも単純な人間行動の一つである遊び―――わけても単純な子供の遊びこそ、私たちの理解と分析を拒むものであるという、昔ながらの嘆きを私たちは繰り返さなければならぬ（P129）。

・私たちに親しい日本民俗学、とりわけ柳田、折口学は、身近なもの、小さなもの、卑しいとされてきたもののなかにかえって深い意味を洞察してきた。彼らの学問、知見、洞察は子供の遊びの理解に新しい局面をひらきはしないか。そんな心づもりでとりあえず「小さき者の声」を聞いてみよう（P129）

・柳田国男は珍しく怒りをこめて次のように言っている。「小さき者が色々の大きな問題を提出いたします。夕方などに僅かの広場に集まって“かーごめかごめ籠のなかの鳥は”と同音に唱えているのを聞きますと、腹の底から所謂国文の先生たちを侮る心が起こります。こんな眼前の是ほど万人に共通なる文芸が今なおその由って来たる所を語ること能わず、辛うじていわけ無き者の力によって忘却の厄から免れておるのです。何かというと“児戯に類す”などと、自分の知らぬ物からは回避したがる大人物が、却って様々の根無し草の種を蒔くのに反して、未だ耕されざる自然の野には、人に由緒のない何物も生長せぬという道理を、曾て立留まって考えてみた者がありましたろうか。単に面白味の点からいうならば、あなた方が御工夫の新しい遊戯の方が優っているのに、家へ戻って方々の児と遊ぶ場合には、やはり東京の焼け野原の真ん中でも、この古臭いわけの分からぬ運動に興奮しますのは、恐らくは言わず語らずの間に、傍らで見ている姉たちや、窓の中で聴いている母や年寄りの、追憶を伴う静かなる鑑賞のあることを、心強く感じている為ではありますまいか」（P130）（柳田国男は「かごめかごめ」を神の口寄せに似た遊びと解釈している。さすれば、これは遊びというより呪術そのものではないかと多田はいう。

・この本では、様々な日本人の遊びが取り上げられて説明されているが、省略する。

**＜中野孝次「良寛に生きて死す」から＞**

　中野孝次は、「清貧の思想」の他多数の著作があるが、良寛やセネカに関する著作を何冊か書いている。表記の本は、中野がガンにかかり死を意識してから書いたもの。良寛の生き方と自分の生き方を自然体で書いている。

・良寛の生き方は、一言で言えば、「優游」である。優游とは、のんびりと心のままに楽しむことを意味する。中野は、自分は死ぬものだと思って日々生きたという。

・良寛の歌の紹介

＜むらぎもの心楽しも春の日に　鳥のむらがり遊ぶを見れば＞

＜つきて見よ　ひふみよいむなやここのとを　とをと納めてまたはじまるを＞

＜うづみ火に足さしくべて臥せれとも　こよひの寒さ腹にとほりぬ＞

＜草の庵に足さしのべて　小山田の山田のかわづ聞くがたのしさ＞

・良寛は、老子や荘子に早くから学んでいた。老子も荘子も自然の中に身を任せて「無為」に何もなさずに同化するのを最高だと言った。これは、「肉体のためあくせくすることを止めたいと思うなら、世間を捨てればいい。捨てるのが第一である。世間を捨てれば、面倒な煩いもなくなり、煩いもなくなれば、心身も平静で穏やかになり、平静であればこの広い世界（宇宙）とともに新たに生まれ変わる」ということ。

・中野孝次からの「5つのおみやげ」（生き方に関する5つのアドバイス）

①物欲を捨てる

②今のために生きよ（明日ありと思うな）

③絶えずゼロの状態に身を置く訓練をせよ

④身を「閑」の中におけ（心身を何もしない状態におくこと）

⑤自分で考え正しく生きよ

・良寛は、（何も生産的なことはせず）人の世話になって生きた。その代わりに、心の世界に生きることを実現した。名誉、財産を求めず、ただひたすら人間としてだけ生きた。

そして、良寛は自分がどこから来てどこに去っていくかを詩に歌った。

＜我が生（しょう）何処より来たる　去って　何処にか行く＞

・良寛辞世の歌

＜形見とて何残すらむ春は花　夏ほととぎす秋は紅葉ば＞・・・冬がないが、、、雪か？

　以上